

〈所有〉の意味概念をもつ他動詞文の分析
—所有他動詞という動詞クラスの存在とその他動詞文の生成プロセス—¹

拓殖大学大学院 小柳昇
univ-oyanagi@nihon5ch.net

0 要旨

影山(2002)が示した「非対格他動詞」という動詞クラスを語彙意味論的なアプローチと認知文法の観点から「所有の意味概念をもつ他動詞」として捉え直し、状態を表す他動詞文、そして発生・消失を表す他動詞文、さらに非意図的で自動詞的な事象を表す他動詞文を包括的に捉えるために「所有他動詞」という動詞クラスを仮定する。これによってこれまで日本語の他動詞構文の中で特異な存在として知られていた「状態変化主体の他動詞文」²を所有他動詞文の1つの型であることを示し、さらに「介在性の表現」³が所有他動詞文の拡張事例として捉えることができることを示す。

所有他動詞文の生成プロセスにかかわる認知的な把握として「場所の焦点化」と「所有者の出来構造化」を仮定し、これが語彙概念構造(LCS)の変換を引き起こし所有他動詞文が生成されると考える。この二つの要因によって生成される所有他動詞文の存在を認めることによって、日本語の語彙的なヴォイスの体系を、「する」「なる」「ある」の3つの構造から「する」「なる」「ある」「もつ」の4つの構造として捉え直すことを提案する。

1 所有他動詞文の全体像

本研究では下の①～③を所有他動詞文として分析した。本発表では研究の出発点となった影山(2002)を概観し、それを発展させるべく、所有他動詞文の生成プロセスにS型とT型の2つの型があることを示す。次いで①-A(3)の「状態変化主体の他動詞文」と③「介在性の表現」を所有他動詞文およびその拡張事例として分析する。

① 意味論的には自動詞なのに他動詞文になっている

①-A: 状態変化の事象を表す

- | | |
|-------------------------------|--------------------------------|
| (1) 二郎は転んで、 <u>骨を折った</u> 。 | (cf. 二郎は転んで、 <u>骨が折れた</u>) |
| (2) 三郎は額から <u>血を流していた</u> 。 | (cf. 三郎は額から <u>血が流れていた</u>) |
| (3) 四郎は空襲で、 <u>東京の家を焼いた</u> 。 | (cf. 四郎は空襲で、 <u>東京の家が焼けた</u>) |

①-B: 発生・消失の事象を表す

- | | |
|----------------------------|------------------------------|
| (4) 妹はきのう <u>熱を出した</u> 。 | (cf. 妹はきのう <u>熱が出た</u>) |
| (5) 私はきのう <u>財布をなくした</u> 。 | (cf. 私はきのう <u>財布がなくなった</u>) |

①-C: 状態を表す

- | | |
|------------------------------|--------------------------------|
| (6) その会社は <u>70年の歴史を持つ</u> 。 | (cf. その会社には <u>70年の歴史がある</u>) |
| (7) レモンは <u>ビタミンCを含む</u> 。 | (cf. レモンには <u>ビタミンCがある</u>) |

¹ 本発表は拓殖大学大学院言語教育研究科の修士論文『〈所有〉の意味概念をもつ他動詞文の分析 —語彙概念構造における「場所の焦点化」と「所有者の出来構造化」のプロセス—』(2009年1月)の内容に基づいてまとめたものである。なお修士論文の全体は本発表者の運営するウェブサイトで閲覧可能(<http://nihon5ch.net/>)

² 天野(1987) 例文(3)を参照

³ 佐藤(1994) 例文(11)を参照

② 形態論的には自動詞なのに他動詞文になっている

②-A：有対自動詞がヲ格をとる他動詞文

(8) 太郎が口をあいている。

(cf. 太郎の口があいている)

[ヲあける ⇔ ガあくーヲあく]

②-B：両用動詞がヲ格をとる他動詞文

(9) 川が水かさを増した。

(cf. 川の水かさが増した) [ヲ増すーガ増す]

②-C：単他動詞がヲ格をとる他動詞文

(10) 山田さんは木村先生に英語を教わった。

[ヲ教わる ⇔ ヲ教える]

③ 実際の動作主を無視する他動詞文になっている

(11) 田中さんは美容院で髪を切った。

(「美容師に切ってもらった」の意味)

(cf. (田中さんが依頼して) だれか(美容師)が、田中さんの髪を切った)

2 先行研究と本研究の「所有他動詞」の位置づけ

2.1 ①-Aについて

2.1.1 先行研究のポイント⁴

1. 使役変化(他)動詞である。(打撃・接触を表す働きかけの他動詞ではない)
2. 主語名詞とヲ格名詞が「所属関係」⁵になっており、いわゆる「再帰構文」になっている。
3. 非意図的な変件事象を表し主語は他動性のスケールにおいて他動詞文として生成される最も端に位置し、「経験者」という意味役割をもつ(図1の網がけの部分)。
4. 主語名詞の人が自身に起った変化の結果を「所有」していることを表している。
5. 主語名詞は動作主または原因者ではないので、受動文が成立しない。

(高) ←────────────────── 他動性 ───────────────────→ (低)
 〈典型的な他動詞〉 〈典型的な自動詞〉

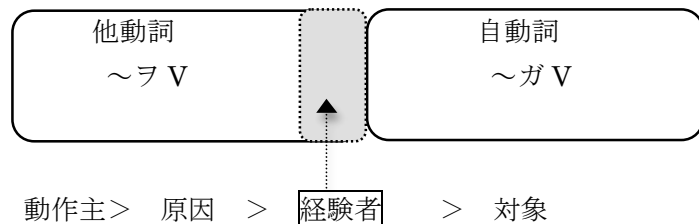


図 1 他動性のスケールから見た非動作主の主語をとる他動詞文の位置付け

2.1.2 問題提起

- ・ 同記事態を、自動詞を使って表現できることをどう説明するか?
 → 他動詞文で「表現しうる」という消極的な理由ではなく、他動詞文で「表現する」理由は?

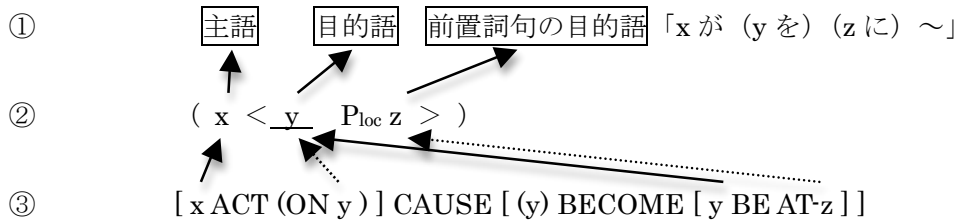
⁴ 天野 (1987)、児玉 (1989)、稲村 (1995) など。

⁵ ここで言う「所属関係」とは、高橋 (1975) が分類した「側面」「部分」「持ち物」「生産物」などの関係を指すが、概念的には、天野 (1987) の捉え方を踏まえて、主語名詞 (x) とヲ格目的語 (y) の関係を「y は x を特徴づける要素として、x と密接な関係にあり、具体的か抽象的かを問わず、また直接的か間接的かを問わず、y の変化が x の変化であると認知できるような一体性をもつ関係にある。通常は、対応する自動詞文の主語において「x の y」のように表示される関係にある。」としておく。

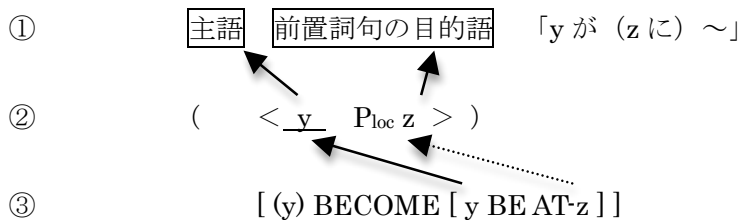
- ・増える : (< y >) [y MOVE (TO-z)]
- 【2項述語】
- ・ある : (< y P_{loc} z >) [y BE AT-z]
- ・入る : (< y P_{loc} z >) [y BECOME [y BE AT-z]]
- ・起る : (< y P_{loc} z >) [BECOME [y BE AT-z]] ※発生
- ・たたく : (x < y >) [x ACT ON y]
- ・壊す : (x < y >) [x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT-BROKEN]]
- 【3項述語】
- ・入れる : (x < y P_{loc} z >) [x ACT ON y] CAUSE [y BECOME [y BE AT-z]]

3.3 構造間のリンク⁷ ①統語構造 ②項構造 ③語彙概念構造

a. 上位事象+下位事象の場合、または上位事象のみ



b. 下位事象のみの場合 (上位事象がない場合)



4 影山 (2002) が示した「非対格他動詞」という動詞クラス

4.1 全体

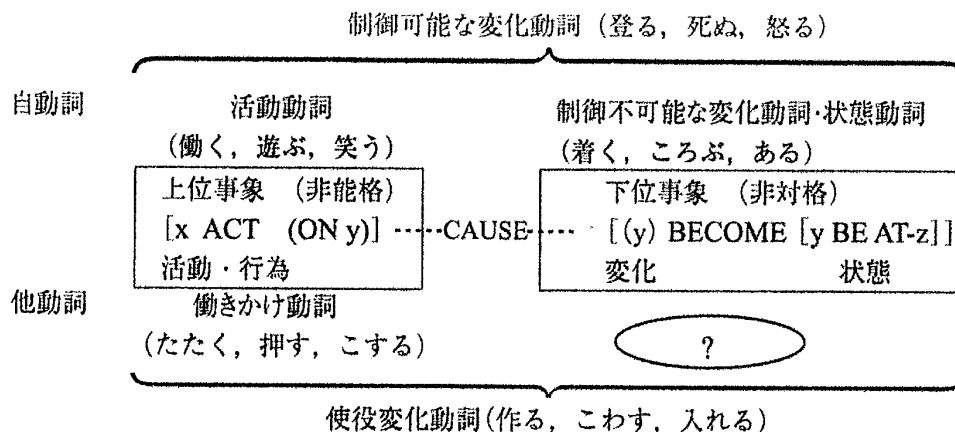


図 3 語彙概念構造と動詞の分類 (影山 2002 : 120 より)

⁷ リンクの対応規則は影山 (1996) をもとに、間接内項を加えて作成したものである。

4.2 上位事象・下位事象と自動詞・他動詞の対応による分類

自動詞		他動詞	
1. 上位事象のみ : 〈非能格動詞〉		働きかけ動詞	
2. 下位事象のみ : 〈非対格動詞〉		?	=> 非対格他動詞
3. 上位+下位事象 : 制御可能な変化動詞		使役変化動詞	

4.3 影山 (2002) が考える非対格他動詞の LCS 変換

〈存在〉 (y が z にある)	〈発生〉 (y が発生して z にある) ⁸
[y BE AT-z]	BECOME [y BE AT-z]
↙	↙
[z _i BE [WITH-[y BE AT-z _i]]]	z _i BECOME [z _i BE [WITH-[y BE AT-z _i]]]
=have	
〈所有〉 (z が、y が z にあることを 伴った状態にある)	〈所有〉 (z が、y が z にあることを 伴った状態にあるようになる)

動詞例：伴う、(ミス)を生じる、(芽)を吹く・・・【自他交替で形態の変化がない】

※ (汗)をかく、(肉刺)を作る、(芽)を出す / 教わる

5 所有他動詞文への LCS の変換プロセス：S 型と T 型

5.1 S 型・T 型と M1・M2 の相互関係 (※レジュメ最終ページに拡大図あり)

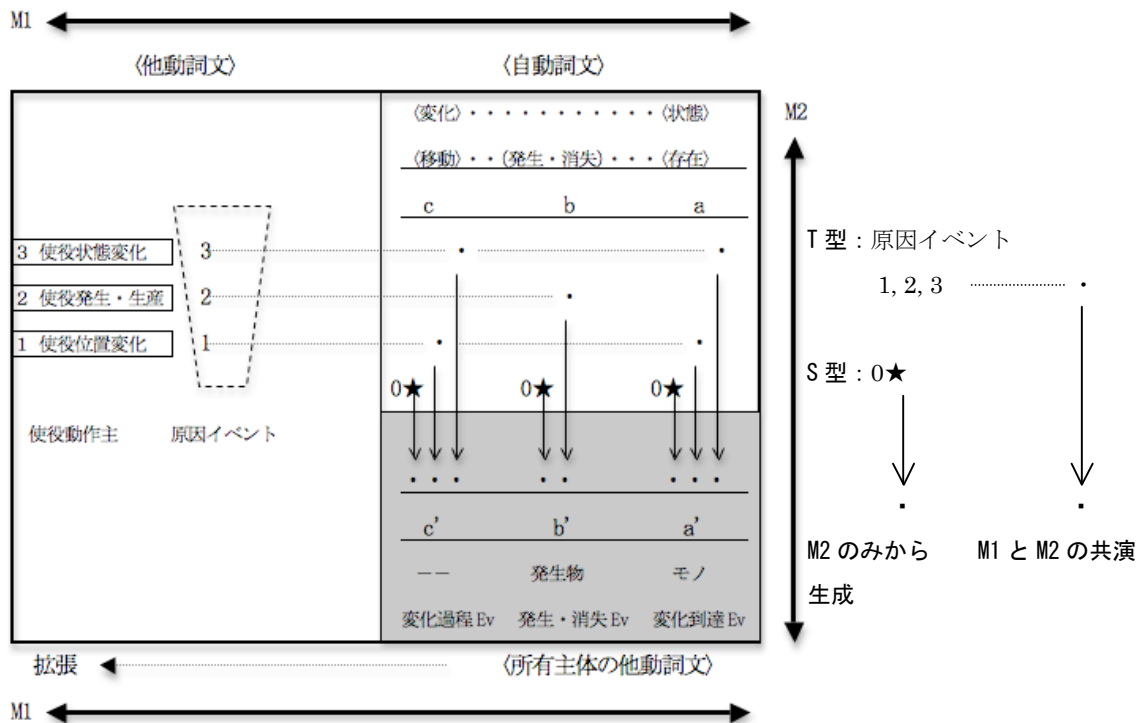


図 4 所有他動詞文の生成と M1・M2 の関係

⁸ 発生から所有への変換については影山 (1996) と影山 (2002) では少し異なる。ここでは影山 (1996) のものを示している。

5.2 「場所の焦点化」と「所有者の出来構造化」⁹

場所の焦点化 : 図と地の反転である。

所有者の出来構造化 : 対象の変化を、所有者を変化事象の出来の場として捉え直し、「対象の所有者において変化事象が発生する」と捉えることである。

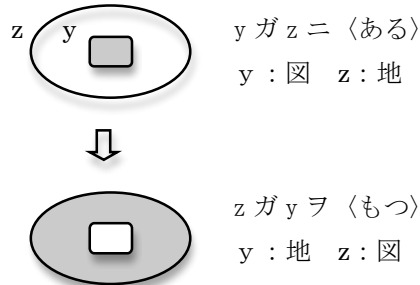


図 5 場所の焦点化

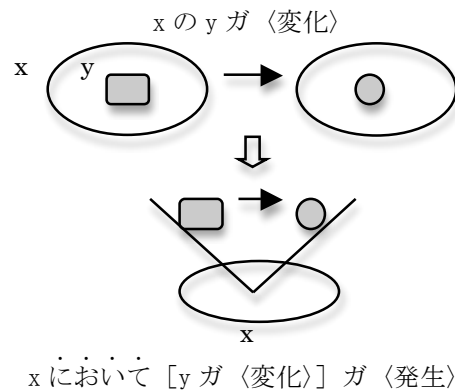


図 6 所有者の出来構造化

5.2 S型の所有他動詞文

5.2.1 S型の定義と特徴

下位事象のみの自動詞の語彙概念構造から「場所の焦点化」(または「所有者の出来構造化」と「場所の焦点化」)を受け、項構造を経て統語構造へ投射される。

- ・M2 (図4参照) によってのみ生成されるタイプで、所有他動詞のコアを形成する。
- ・所有他動詞は固有の形態または自動詞と同じ形態 (= 自他両用動詞) である¹⁰。

5.2.2 S型の所有他動詞文のタイプと動詞の例 (図4参照)

自動詞文	所有他動詞文	
(i) ★a0 モノ の存在	→ a'0 モノ の所有	}
(ii) ★b0 モノ の発生+存在	→ b'0 モノ (発生物) の所有	
	「要する」「伴う」	※「非対格他動詞」
	「(粉を) 吹く」「(芽を) 吹く」「(ミス)を 生じる」「(眠気)を 催す」	
↑ 「場所の焦点化」のみが働く		
↓ 「所有者の出来構造化」と「場所の焦点化」が働く		
(iii) ★b0 発生・消失 Ev	→ b'0 発生・消失 Ev の所有	※「非対格他動詞」
	「(火山が火を) 噴く」「(蒸気)を 噴き上げる」	
Event	「(事故で足を) 失う」	

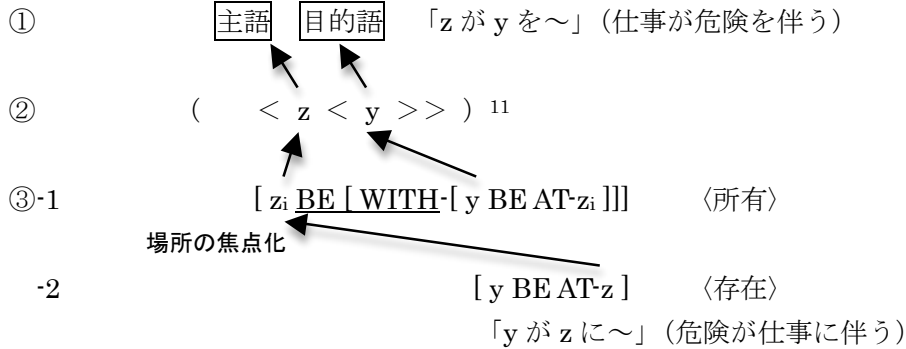
⁹ 「出来 (しゅったい)」という用語と概念は尾上 (1989-1999) の「出来文」という事態の捉え方にヒントを得ている。また、この所有者の出来構造化は「所有者」を参照点に、変化事象をターゲットにした参照点構造 (Langacker 1993) の認知プロセスに基づいていると考えられる。

¹⁰ S型では形態の変化を伴わない理由については、影山 (2002) で「下位事象」のみで自他が交替しているからだとしている。本研究はこれを支持するが、所有他動詞というより広い枠組みで捉え、両用動詞以外にも「(ある -) 要する」「(なくなる -) 失う」などの固有の形態をもつ動詞もS型に分類される。

(iv) ★c0 移動・変化 $\boxed{\text{Ev}}$ → c'0 変化過程 $\boxed{\text{Ev}}$ の所有
 「(水かさを) 増す」

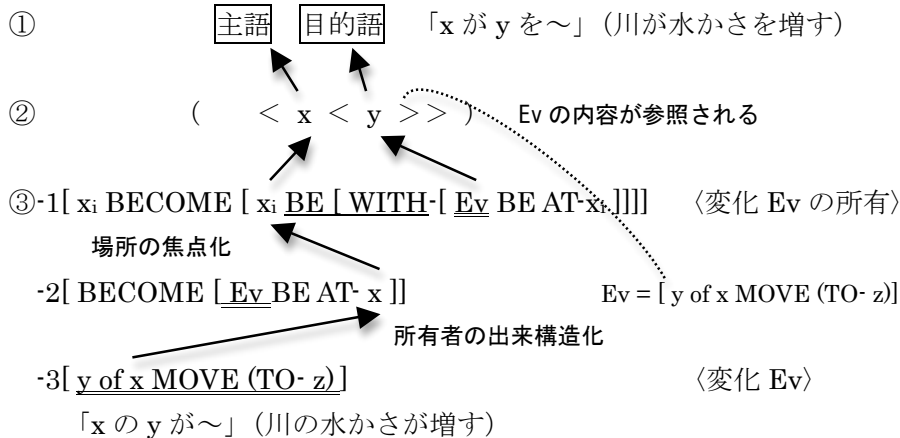
5.2.3 S型の所有他動詞文の生成プロセス：「場所の焦点化」のみの場合

$\boxed{\text{モノ}}$ の所有の場合：a'0



5.2.4 S型の所有他動詞文の生成プロセス：「所有者の出来構造化」と「場所の焦点化」の場合

$\boxed{\text{Ev}}$ の所有の場合：c'0



5.3 T型の所有他動詞文

5.3.1 T型の定義と特徴：

下位事象のみの自動詞の語彙概念構造が、原因を表すイベントを上位事象に付加することによって使役変化の概念構造となる。これがベースとなり、その下位事象がプロファイルされ¹²、「場所の焦点化」(または「所有者の出来構造化」と「場所の焦点化」)を受け、項構造を経て統語構造へ投射される。

- ・ M1 と M2 (図2) の共演によって生成されるタイプである。
- ・ 使役変化動詞と同じ形態である。

自動詞的な事象を「因果関係」をもつ使役変化事象として捉え直すことによって、形態上は使役変化動詞と同じになるが、プロファイルされるのは下位事象のみなので、同じ形態

¹¹ 項構造において焦点化された場所項 'z' は内項であるが、疑似的な外項の地位にあると考えられる。'z' が二重の山括弧内の '外側' に位置しているのがそれを示している。このように考えることで、「Burzioの一般化」(外項をもつ動詞のみが目的語に対格を付与することができる。Burzio 1986) に違反することなく、外項をもつとみなされて目的語に対格を付与することを説明できる。

¹² ベースとプロファイルの概念については Langacker (1987) を参照。

をもった所有他動詞文が生成される。

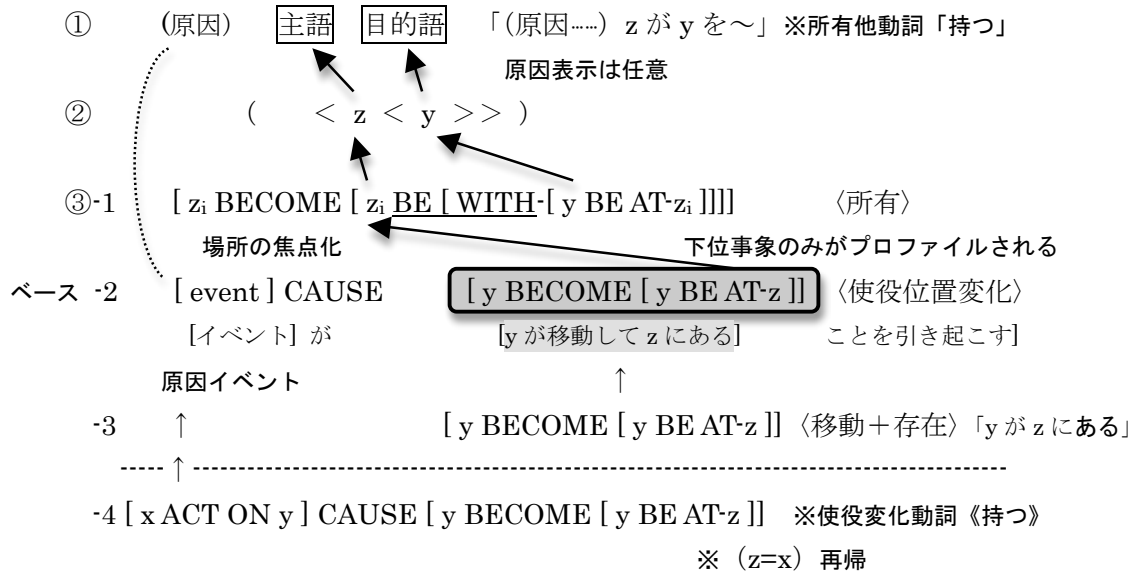
- ・ベースには存在しながらプロファイルされなかった「原因イベント」は意味的に含意されているが、構文タイプによっては使役変化他動詞の意味を排除するために統語上への表示が求められる。(これについての考察は 6.1.3 を参照)

5.3.2 T型の所有他動詞文のタイプと動詞の例 (図4参照)

	使役変化他動詞文	自動詞文	→	所有他動詞文
(i)	1 使役位置変化	~ a1 モノ の移動+存在	→	a'1 モノ の所有 「持つ」「表す」「知る」/「欠く」
(ii)	2 使役発生・生産	~ b2 モノ の発生+存在	→	b'2 モノ (発生物) の所有 「(事故を) 起こす」「(こぶを) 作る」「(熱を) 出す」
↑ 「場所の焦点化」のみが働く				
↓ 「所有者の出来構造化」と「場所の焦点化」が働く				
(iii)	2 使役発生・生産	~ b2 発生・消失 Ev	→	b'2 発生・消失 Ev の所有 「(ため息を) もらす」「(やる気を) なくす」
(iv)	3 使役状態変化	~ a3 状態変化 Ev	→	a'3 変化到達 Ev の所有 「(骨を) 折る」「(指を) 切る」 「(肉刺を) つぶす」「(家を) 焼く」
(v)	1 使役位置変化	~ c1 (移動) 変化 Ev	→	c'1 } 「(汗を) 流す」「(涙を) こぼす」 変化過程 Ev の所有
	3 使役状態変化	~ c3 (状態) 変化 Ev	→	

5.3.3 T型の所有他動詞文の生成プロセス: 「場所の焦点化」のみの場合

モノの所有の場合:



¹³ 形容詞由来の「～まる」動詞については、杉岡 (2002) が LCS によって分析しているが本研究とは異なる。

5.3.4 T型の所有他動詞文の生成プロセス：「所有者の出来構造化」と「場所の焦点化」の場合

Evの所有の場合：



6 構文の分析

6.1 「状態変化主体の他動詞文」(天野 1987)

6.1.1 状態変化主体の他動詞文とその構文の成立条件 (2.1.1 も参照)

天野(1987)は、主語名詞が意味役割としては経験者だが、主体が事態の引き起こし手ではなく、状態変化する主体であり、事態を所有するという意味になる他動詞文を「状態変化主体の他動詞文」と呼んだ。

(12) 私たちは、空襲で家財道具をみんな焼いてしまった。(=天野 1987 (1))

cf. うっかりたばこの火を落とし、カーペットを焦がしてしまった。

(13) 勇二は教師に殴られて前歯を折った。(=天野 1987(2))

cf. 転んで前歯を折った。

(14) 気の毒にも、田中さんは昨日の台風で屋根を飛ばしたそうだ。(=天野 1987 (3))

(15) 私は、大雪で庭木の枝を折った。(=児玉 1989 (1 ウ))

【成立条件】

1. 使役変化(他)動詞である。
2. 主語名詞とヲ格名詞が所属関係になっている。
3. 「原因」にあたるものが文脈上に示されなければならない。
 ※使役変化(他)動詞を使いながら、主語名詞が述部の表す事態の成立した結果を所有するという意味になるための条件

6.1.2 従来の分析のポイント¹⁴

1. 使役変化他動詞の場合、主体の動作の過程（＝上位事象）と客体の変化の過程（＝下位事象）があり、下位事象に焦点があたることによって¹⁵、極めて他動性の低い「事態を所有する」という意味を表す他動詞文が成立する。
2. そのような他動詞文が成立するには、構文上、主語名詞とヲ格名詞が所属関係になっており、「客体変化⇒主体変化」になっていなければならない。
3. そのような意味で解釈するためには、（主語名詞が動作主でなく受影者であることを明らかにするために）外部に存在する「原因」を示さなければならない。

6.1.3 所有他動詞文としての分析

【従来の分析】 〈する〉から〈もつ〉へ

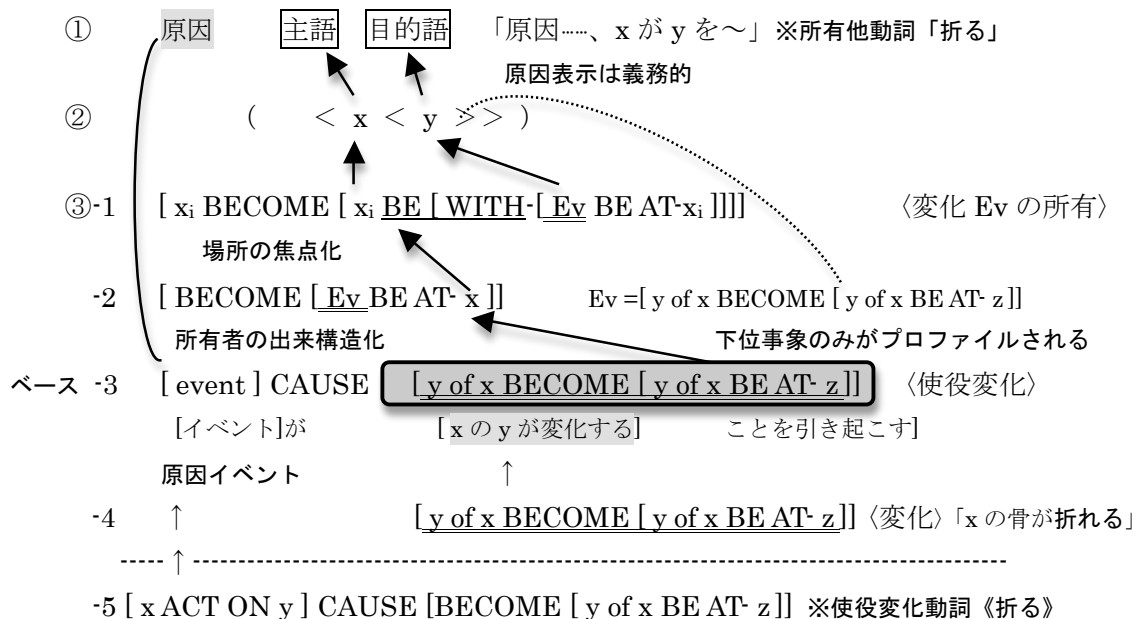
他動詞側から自動詞側への接近・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・M1のみを想定（図4）

【所有他動詞文としての分析】 〈なる〉から〈もつ〉へ

自動詞側から他動詞側への接近

S型：下位事象のみから生成される・・・・・・・・・・・・・・・・M2（図4）

T型：[上位事象（原因イベント）＋下位事象]が認知的な把握のベースになり、
下位事象のみがプロファイルされて生成される・・・・・・・・M2とM1の共演（図4）



【キャンセル文が不成立の理由】

- (16) *四郎は火事で家を焼いたが、焼けなかった。（状態変化主体の他動詞文）
- (17) *三郎は転んで骨を折ったが、折れなかった。

¹⁴ 1.と2.は天野（1987）が条件1,2として挙げたものに相当する。天野は「所属関係」ではなく「全体部分の関係」という用語を使っているが、意味していることはほぼ重なる。3.は児玉（1989）で指摘された条件である。

¹⁵ 佐藤（2005）では状態変化主体の他動詞文が「メトニミー」によって分析されているが、これも基本的には使役他動詞の事態の局面の全体（＝動詞が表す事態）と部分（＝実際に意味する事態）という捉え方をしている点で共通している。

【所有他動詞文としての解釈と原因イベントの統語構造上への表示義務】

- ・ T 型の所有他動詞文の生成プロセスでは、原因イベントが上位事象に読み込まれるが、プロフィールはされないで、統語上の表示は任意である。表示されなくても含意される。
- ・ 通常は構文論的および語用論的な要因によって、使役変化他動詞を用いながらも所有他動詞文としての解釈が読み込まれるが、使役変化の意味が完全に排除されるためには、プロフィールされなかった原因イベントの統語構造上への表示が必要となる。

「原因 ⇒ なる ⇒ もつ」 (排除:「動作主 ⇒ する ⇒ なる」)

- ・ 所有他動詞文としての解釈のための原因イベント表示の必要性は、タイプによって異なる。(A) が最も低く (C) が最も高い¹⁶。他のタイプは相対的に見て中間 (B) に位置する。

語彙的に再帰が指定	語彙的に再帰が指定されていない	
A	> B	> C
a' 1 「モノの所有」	b' 2 / c' 1, c' 3	a' 3 「変化到達 Ev の所有」
「持つ」「知る」「欠く」など		「折る」「切る」「焼く」など

表 1 原因イベントの統語構造への表示の必要性の高低

6.1.4 結論

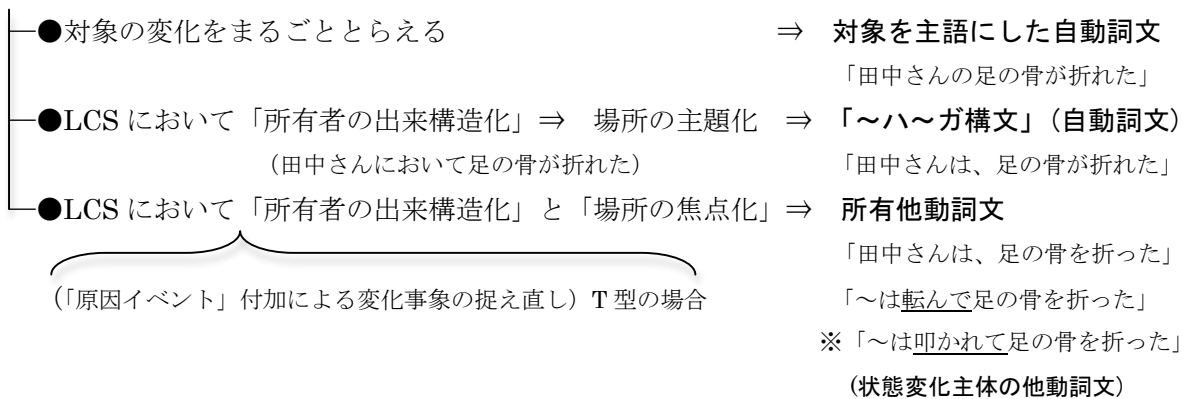
状態変化主体の他動詞文は、T 型の「変化到達 Ev の所有」を表す所有他動詞文であり、プロフィールされなかった「原因イベント」の統語上への表示が義務的になるタイプ。

7 まとめ (所有他動詞文として捉えることでどのように説明できるか)

2.1.2 に示した問題提起 (pp.2-3) に対する答え

- ・ 自動詞文で表現できるものを他動詞文で表現するのは、事態の認知的な把握の違いによる。

〈変化事象〉



- ・ 所有他動詞文に S 型と T 型を仮定することによって、①-A~C を統一的に合理的に説明できる。
- ・ 所有他動詞文は、通常の (上位事象の) 外項をもたないため、受動文が成立しないが、焦点化された場所項が際立ちをもち疑似的な外項となり、ヲ格名詞をとる他動詞文として成立する。

¹⁶ 語彙的に再帰が指定されていないタイプの高低の決定については恣意的な操作である印象は拭えないが、ここでは認知的に見て対象の属性を変化させる場合に最もエネルギーが必要であるという素朴な捉え方が原因イベントの際立ちに反映していると考え、a'3 を「統語構造上への表示の必要性が最も高い」としておく。

8 課題：「介在性の表現」を所有他動詞文の拡張事例として考えることができるか？

8.1 介在性の表現とその構文の成立条件

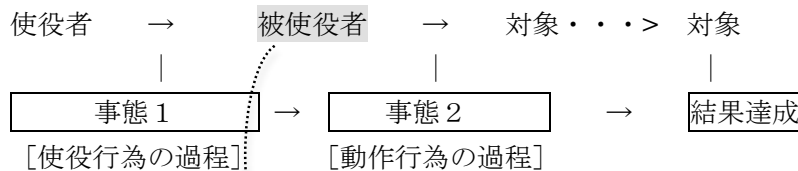
8.1.1 介在性の表現とは

「述語のヴォイスの形態が無標であるにもかかわらず、主語が動詞の示す行為の主体ではないという解釈をも許すもの」（佐藤 1994：53）基本的な性格として、「使役的状况」としての意味的特徴を有している一方で、「話者が実際には存在する被使役者を無視して、あたかも主語自身がすべての過程を自分で行ったかのようにとらえている」という特徴をもっているため、「表現する事態と言語形式の間に大きなずれがある」（同書：57）¹⁷

(18) 佐藤（1994：54）より

- a. 医者が患者に注射した。
- b. 患者が注射した。（介在性）
- c. 大工が（山田さんの）家を建てた。
- d. 山田さんが家を建てた。（介在性）

【使役事象の参与者と事態の局面】



【介在性の表現】



8.1.2 介在性の表現が成立する2つの要因

1. 事態のコントロール

「事態2」を無視するということは使役者が事態全体をコントロールしていると認知されなければならない。被使役者の主観によって結果達成が左右されるような事態であってはならない。

(19) 佐藤（1994：58）より

- a. （浩が写真屋に依頼して、顔写真をとってもらった場合）
浩が顔写真をとった。（介在性）
- b. （浩が画家に依頼して、似顔絵をかいてもらった場合）
*浩が似顔絵をかいた。（介在性）

2. 動詞の意味的焦点

「事態2」を無視するということは動詞が表す意味がそのような過程のあり方に焦点を当てるようなものであってはいけない。

(20) 佐藤（1994：60）より

- a. （花子が人に依頼して洋服を作ってもらった場合）
花子が洋服をつくった。（介在性）

¹⁷ 佐藤（2005）ではこの「表現する事態と言語形式の間に大きなずれ」を「メトニミー」によって説明している。

- b. (花子が人に依頼してセーターを編んでもらった場合)
 *花子がセーターを編んだ。(介在性)

8.2 所有他動詞文の拡張として分析する

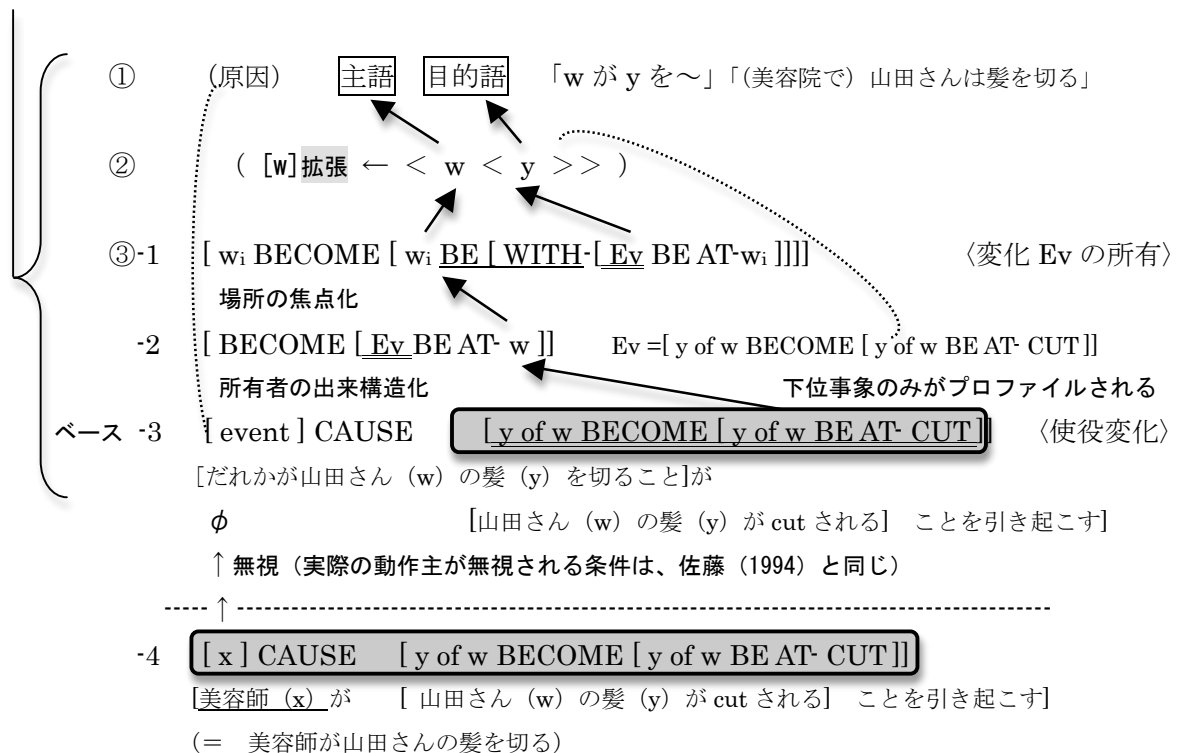
【佐藤 (1994) の分析】¹⁸

〈仕手〉の視点からの分析・・・使役状況の複数の局面の焦点化と脱焦点化

【所有他動詞文の拡張事例としての分析】

〈受け手〉(=受益者)の・・・脱焦点化された実際の動作主(外項)の代わりに「**変化到達 Ev** 視点からの分析¹⁹ 所有(a'3)」の他動詞文の主語が格上げされ(=②)、外項に位置にすわる。

※T型の所有他動詞文の生成プロセスと同じ



【介在性の表現の3つのタイプ】²⁰

主語(N1)とヲ格名詞(N2)＋述部の意味関係によって3つに分類する。

1. 「N1のN2をV」型 : 山田さんは美容院で髪を切った。(← a'3: 上に示した生成プロセス)

・「(サロンで) 爪の手入れ/顔面パックをする」「(歯医者で) 虫歯を治療した/抜いた」など

¹⁸ 介在性の表現を扱った先行研究としてはほかに、再帰構文の枠組みで分析している稲村(1995)、「行為の主体」がどのように認識され、どのような形式で表現されるかという視点で分析している須賀(2000)がある。後者は「主体が事態の出現に対して非意図的であること」そして「成立要因も異なる」(同書: 21)として「状態変化主体の他動詞文」(天野1987)とは区別しているが、前者では同じ枠組みで分析している。

¹⁹ 須賀(2000)では「いわゆる他動詞文であっても、「原因—結果」という認識の枠組みだけでなく、〈受け手〉も行為者であるような、行為を中心とした認識の枠組みがある」(同書29)と述べているが、具体的な他動詞文の生成プロセスについては具体的に示していない。また、主語が受益者になる点を踏まえて、LCSにおいて「被影響」を意味する‘affected’という意味述語を導入した分析も行われているが(今泉2003など)、本研究は所有他動詞文の拡張として分析している。

²⁰ 広く捉えれば1も2も意味的には3に含まれるが、実際に現れる格配列によって3つに分類しておく。

・「顔写真を撮る」「ドレスを作る」「家を建てる」「時計を修理する」「合い鍵を作る」など²¹

2. 「N1にN2をV」型 : 山田さんは病院で注射をした。(← a'1:「モノの所有」の拡張)

3. 「N1のためにN2をV」型 : 将軍は村人を皆殺しにした。(← 「goal型」²²の所有他動詞文の拡張)

「社長はロンドン支社から資料を取り寄せた」「社長は社員寮を建てた」

9 結語

所有他動詞という動詞クラスの使用は日本語に限ったことではないが、英語の所有動詞‘have’が語彙的および構文的なヴォイスの体系の中で重要な役割の担っているのに対して、日本語の「持つ」にはそのような働きはない。池上(1981)が指摘するように日本語は所有の意味概念の中心を担っているのが「ある(いる)」で、BE型言語と言われる。さらに、日本語が「なる型言語」であるという指摘を踏まえれば、下位事象(「なる」「ある」)を基本単位とした構文の拡張という視点で語彙的ヴォイスを捉えることが大切ではないだろうか。本発表では、従来の研究で‘特異な他動詞文’と見られていた「状態変化主体の他動詞文」「介在性の表現」を取り上げ、どちらも「もつ」という意味概念とつながっていることを示した。

◆主要参考文献・引用文献

- 天野みどり(1987)「状態変化主体の他動詞文」『国語学』151 国語学会 左1-14 (110-97)
- 池上嘉彦(1981)『「する」と「なる」の言語学』大修館書店
- 稲村すみ代(1995)「再帰構文について」『東京外国語大学日本語学科年報』16 55-80
- 井上和子(1976)『変形文法と日本語・下・意味解釈を中心に』大修館書店
- 今泉志奈子(2003)「日本語動詞の分類にもとづく統語論」『日本語学』22(10) 明治書院 24-39
- 大倉直子(2004)「所有関係構文と派生的意味解釈」『言語科学研究: 神田外語大学大学院紀要』10 神田外語大学 41-65
- 尾上圭介(1998-1999)「文法を考える5 出来文」『日本語学』17(7),17(10),18(1) 明治書院
- 影山太郎(1996)『動詞意味論 一言語と認知の接点一』くろしお出版
- 影山太郎(2002b)「非対格構造の他動詞」伊藤たかね編『文法理論: レキシコンと統語』東京大学出版会 119-145
- 児玉美智子(1989)「状態変化主体他動詞文の成立と構造」『甲子園短期大紀要』9 甲子園短期大学 67-80
- 佐藤琢三(1994)「他動詞表現と介在性」『日本語教育』84 日本語教育学会 53-64
- 佐藤琢三(2005)『自動詞文と他動詞文の意味論』笠間書院
- 須賀一好(2000)「行為の主体に関する認識と表現」『山形大学日本語教育論集』3 山形大学 21-30
- 杉岡洋子(2002)「形容詞から派生する動詞の自他交替をめぐって」伊藤たかね編『文法理論: レキシコンと統語』東京大学出版会 91-116
- 高橋太郎(1975)「文中にあらわれる所属関係の種々相」『国語学』103 1-17
- 坂野取(2004)「所動詞的他動詞再考」『中田清一教授退任記念論集』青山学院大学大学院国際コミュニケーション学会言語研究部会 75-85
- ヤコブセン, ウェスリー・M(1989)「他動性とプロトタイプ論」久野・柴谷編『日本語学の新展開』くろしお出版 213-248
-
- Burzio, Luigi (1986) "Italian Syntax: A Government-Binding Approach" Reidel.
- Heine, Bernd (1997) "Possession: Cognitive sources, forces, and Grammaticalization" Cambridge University Press.
- Hopper, Paul and Sandra Thompson (1980) "Transitivity in Grammar and Discourse" *Language* 56: 251-299
- Langacker, R. W. (1987) "Foundations of Cognitive Grammar. Vol.I. Theoretical Perspective." Stanford University Press.
- Langacker, R. W. (1993) "Reference-point constructions." *Cognitive Linguistics* 4(1): 1-38.
- Rappaport, Malka and Beth Levin (1988) "What to Do with θ -roles" in W. Wilkins ed. *Thematic Relations (Syntax and Semantics 21)*. 7-36. Academic Press.

²¹ 佐藤(1994)も指摘しているように、これらの事態では結果物を主語名詞の人が所有するとみることができる。この点から言えば、「モノの移動+存在」から生成される「モノの所有」「モノ(発生物)の所有」(a'1・b'2)と接点をもつが、ここでは統語構造に現れる各配列の点から見て「N1のN2をV」型に分類しておく。

²² この「goal型」というのは、Heine(1997: 47)の所有の表現形式につながるイベント・スキーマの名称に由来する。Goalというスキーマは‘Y exist for/to X’という型とつながっている。

5.1 図 4 の拡大図 (p.5)

